

ボランティア40年「誰かじゃない、俺がやる」

地震当日むかわり 炊き出し、食材調達

【むかわ】「自衛隊や行政にはできない支援が、俺らにはできる。炊き出しでもがれき掃除でも、何でもするよ」。胆振東部地震の被災地で、発生当日の6日から炊き出しや食材調達などの支援を続けたボランティア団体「災害救援ネットワーク北海道」（十勝管内清水町）代表の山口幸雄さん（71）が28日、いったん帰宅した。必要に応じて、また通うつもりという。

（若松樹）

山口さんは地震発生直後、清水町の自宅を出発。夕方には震度6強の揺れに見舞われたむかわ町の避難所前で炊き出しを始めた。手に入った食材を生かして野菜炒めや豚汁、焼きうどんを作り、被災者の胃袋を気持ちよく温めた。食事情が安定してきた3週間目ころからは、避難所に食材を配分した。



道の駅「四季の館」前で豚汁をつくる山口さん

食材は、山口さんの活動に賛同する空知管内長沼町や伊達市など全道20カ所ほどの農家から調達。会員制交流サイト（SNS）を活用して集めた支援金で被災した地元企業から買い付けることもある。

山口さんのボランティア人生のスタートは、1978年の高知県の水害。テレビや新聞で見る惨状に耐えかね、会社を休んで現地に駆けつけ、炊き出しやがれきの片付けをした。以来、災害のたびに仕事をやりくりしてボランティアに行き、定年前の58歳で脱サラしボランティア団体を立ち上げ、活動に専念している。2011年の東日本大震災では、宮城県南三陸町で震災発生1週間後から3年間、車中泊を続けながらボランティアを続けた。災害によって、ライフラ

インの停止や食料不足、建物の倒壊など、さまざまな支障が出る。山口さんは、40年以上のボランティア経験で、その解決に必要な機動力や柔軟性、人のネットワークを身に付けてきた。厳しい環境で被災者に手を差し伸べ続ける原動力は、「俺ならできる」自負心。「助かりました」という被災者の笑顔は、もちろんうれしい。しかし、山口さんは「評価されたくてやっているんじゃないんだ。誰かやるだろうじゃないか、俺がやる。使命感みたいなものだ」と話している。

子供たちの心

ケア忘れない

「ひろば」閉鎖で感謝状

【安平】被災した子供たちの精神的なケアを目的に町早来大町に開設されていた「あそびのひろば」が28日、保育所や学校の再開の動きに合わせて閉鎖され、子供と保護者たちからボラ